「人の移動と文化」

三島禎子
（みしま　ていこ）
国立民族学博物館

一般にアフリカには経済主体が存在しないとみなされている。すなわち、西欧諸国によるアフリカ進出が始まった 16 世紀以後、アフリカは次第にヨーロッパの世界資本主義経済にまき込まれ、植民地支配下においてその経済的自立性を失い、世界システムの周辺に追いやられたと考えられている。このような西欧による支配とアフリカ蔑視にもとづいた歴史認識は、アフリカに住む人びとの固有の価値観や自立した営みに対する無関心を反映している。そのような欠落部分を補う作業を得意とする文化人類学においてでさえも、コロニアリズムから脱する努力が必要とされたことは周知のとおりである。

本発表では世界システム論を前提としながらも、上記の問題点に立脚することによって、アフリカ経済がどのように世界経済と連動しているかを示し、アフリカ内部からみた経済史を描くための理論的構築を試みる。具体的には、今日では「労働移民」として知られるソニンケという人びとに注目して、その移動史を植民地時代から 21 世紀までの時間軸のなかに位置づけるにことによって人の移動を文化的要因から検討する。人や情報、あるいは共有された文化価値などのネットワーク、および少ない資本を利用しながら、各時代の変化に柔軟に対応してきた人びとの営みをとおして、現代アフリカへの理解につなげたい。

坂井氏の発表は、19 世紀末までの西アフリカの交易民（ソニンケを含む）を対象としており、時代的にも本発表と連続性があるばかりでなく、研究の出発点における問題関心の持ち方においても共通する姿勢があると思われる。ただし、坂井氏がシステムや制度などを中心とした全体主義的な視点をもっているのに対し、本発表者は個人の欲求や機動力を基盤とする文化、または人びとの主観的なエートスに関心をもっている。しかしながらこれらは互いに相反するものではなく、むしろ補完しあうものであり、異なった視点を組み合わせてゆくことこそ今後の課題となる。そこからアフリカ経済史の再構築が進むのではないかと考えている。